

### 位置と環境

遺跡の所在する種子島は最高標高が282.2mしかない低平な島である。遺跡は西之表市の東南部に位置し、中種子町との境に近い太平洋を望む標高133mの台地上に立地する。台地の北側には大川田川、南側には早稲田川が東流し、太平洋に注いでいる。

### 調査の経緯

平成4年に農道の建設工事が計画されたことに伴って西之表市教育委員会が確認調査を実施した。確認調査の結果に基づく協議が行われたが、設計変更による現状保存は困難と判断され、平成5年に約1,000㎡を対象として本調査が実施された。

### 遺構と遺物

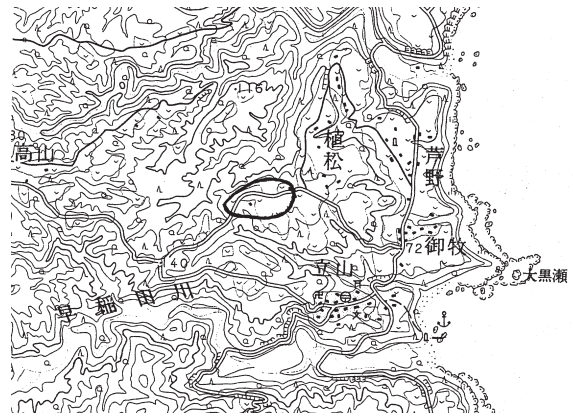
アカホヤ火山灰層の下から縄文時代早期の遺物が、さらにその下の層から縄文時代草創期の遺構や隆帯文土器などの遺物が発見された。従来の発掘調査の成果から、縄文時代早期中葉以降（約8,000年前）、種子島が県本土と共通の文化圏に属することが知られていた。本遺跡から隆帯文土器が出土したことにより、種子島の縄文文化が草創期にまで遡ることが明らかになった。

草創期の遺構としては、集石遺構19基、配石遺構2基、土坑1基が発見された。集石の石材は地元産の砂岩であり、円礫は少なく、角礫ないしは板状の礫で構成されているものが多かった。礫の大きさは拳大が主であったが、20cmを越すような大きな礫が含まれている集石も発見された。

隆帯文土器は隆線文土器の範疇に含まれ、南九州の隆線文土器は装飾のために土器に貼り付けられる粘土紐が太いことから、隆帯文土器と呼ばれている。一般的な隆帯文土器は、隆帯の上に指頭を押つけた文様の土器がほとんどであるが、本遺跡では貝殻で文様を施した隆帯文土器が多く出土したことが注目される。大隅海峡を隔てた宮崎県串間市大平遺跡でも類例の出土が報告されており、種子島と宮崎県南部との間で交流があったものと考えられる。

石器としては、石鏃、スクレイパー、石斧、磨石、石皿などの多様な器種が出土した。

草創期では打製石鏃が一般的だが、本遺跡では打



第1図 奥ノ仁田遺跡の位置

製石鏃のほか磨製石鏃が1点出土しており、国内では最古の部類に属するものとして注目される。後年調査された中種子町の三角山Ⅰ遺跡でも類例の出土が報告されており、種子島地方の草創期文化の特徴のひとつと考えられる。

石斧の形態はさまざまで、樹木の伐採用以外に、木材の加工に用いられたと思われる小型の石斧も出土した。また、丸ノミ形石斧も1点出土し、加世田市杵ノ原遺跡などの草創期文化との共通性が認められる。

ドングリ類などの植物性食料の調理具とされる磨石と石皿が大量に出土したことも注目される。狩猟具である石鏃が4点しか出土しなかったのに対して、磨石・敲石・凹石が242点、石皿が14点も出土した。石皿の中で最も重いものは28kgもあり、移動生活には不向きな道具である。このことから植物性食料を中心とした定住に近い生活が営まれていたことが想像される。

### 特徴

発掘調査によって縄文時代草創期文化が大隅海峡を隔てた種子島にまで広がっていたことが明らかとなった。貝殻を用いた隆帯文土器はこれまでに類例が少なく、種子島地方独特の土器であるといえる。

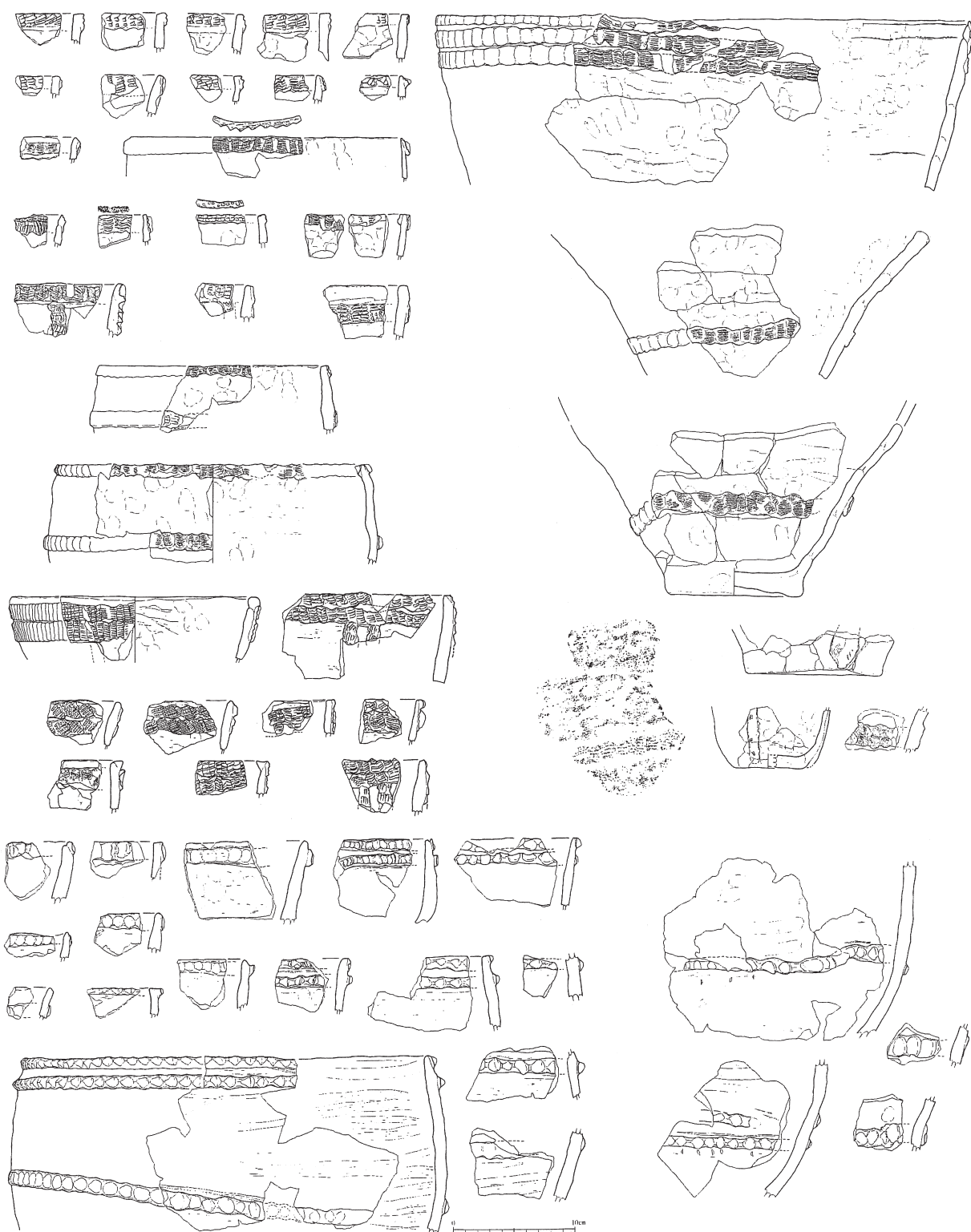
### 資料の所在

出土遺物は、西之表市教育委員会種子島開発総合センター（鉄砲館）に保管・展示されている。

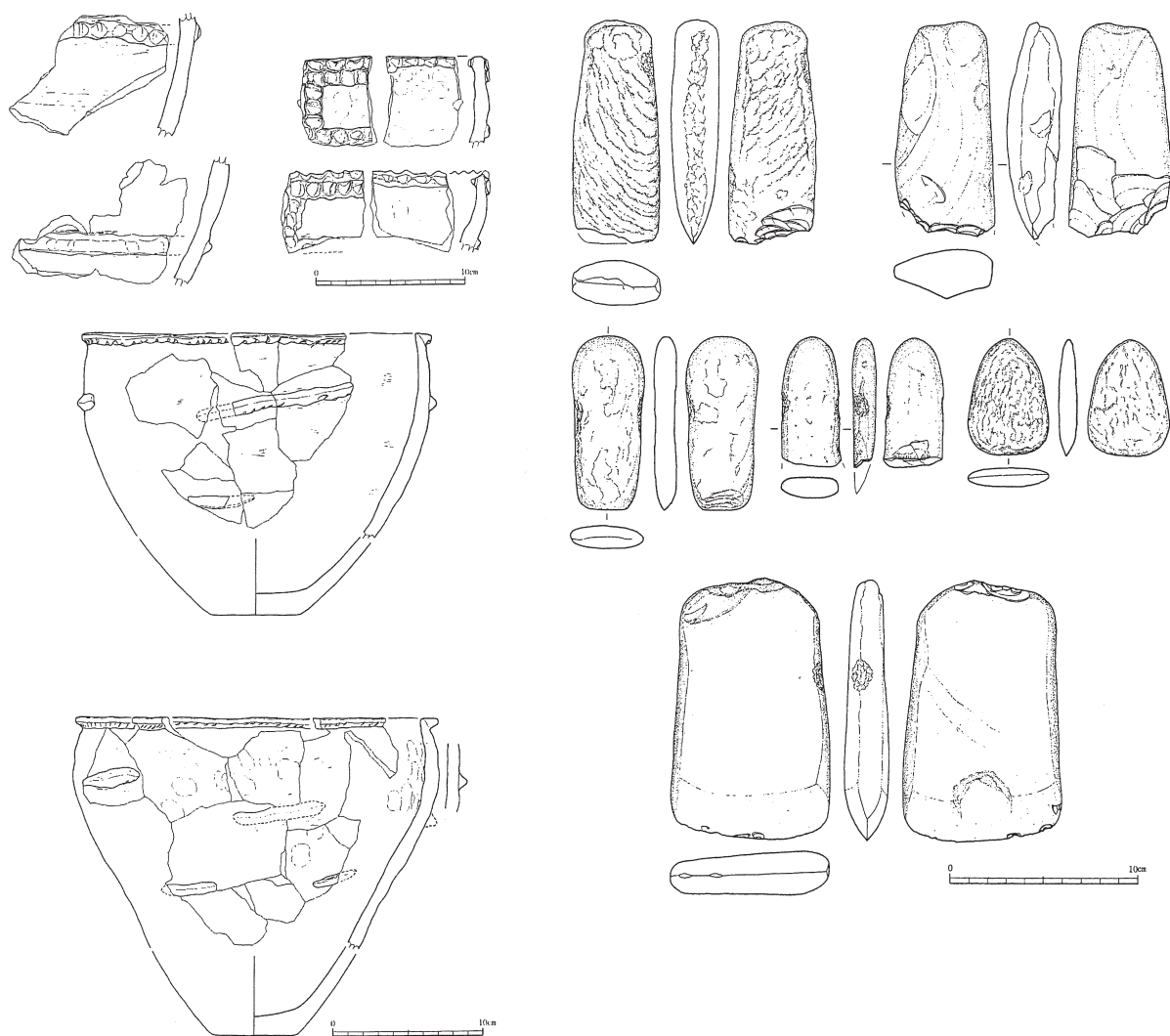
### 参考文献

西之表市教育委員会1995「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』7

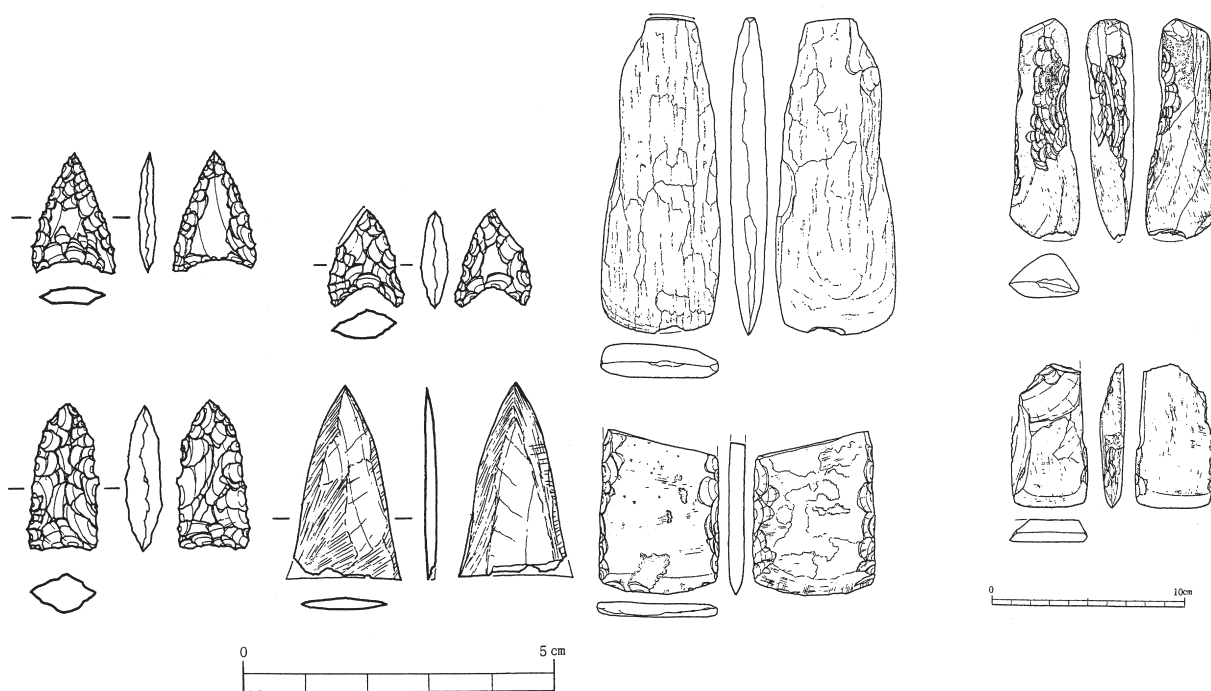
(児玉健一郎)



第2図 縄文時代草創期の土器



第3図 縄文時代草創期の土器



第4図 石鏃

第5図 石斧